

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

神狼の戦巫女
神風沙織
— かななぎさおり —

小説 斐芝嘉和

挿絵 Maruto!

第一章	緋袴の戦士	006
第二章	沙織と芳美	021
第三章	歪む理	038
第四章	蹂躪	055
第五章	穢れた巫女	099
第六章	希望	139
第七章	神具陵辱	158
第八章	淫儀・降臨	199
エピソード		251

登場人物紹介

Characters



かななぎ さおり
神風 沙織

美波学園二年生。戦巫女の筆頭として、対魔物戦闘の指揮官として活躍している。

なかさと よしみ
中里 芳美

沙織の同級生。家が大金持ちでお嬢様育ち。優秀な戦巫女として有名だった姉を過去に亡くしている。

あらふか どうげん
荒深 道玄

謎の魔物使い。

逃れるつもりで腰を捻ったのに、目を血走らせた狼は執拗に鼻を押しつけてきた。尻を上げる。ついてくる。左右に振る。ついてくる。

「やだ、筆頭巫女様がお尻を振り始めたわ！」

「……っ!? ち、ちが……ンうっ！」

「ああして疾風丸様を誘っていたんだな。可愛い顔して、ド変態じゃないか」

ニヤニヤし始めた観客の中から、

「お、俺は信じないぞ！ 沙織様は変態じゃない！ 狼なんかと犯るわけがない！」

かぶりつきで見っていた男が立ち上がり、客席に向かって叫び始めた。

（み、味方してくれるのですか!?)

期待を込めて見上げた沙織はしかし、男の頬に浮かんだ溢れ出さんばかりの喜色に気づいて声を失った。筆頭巫女を助けようというのではなく、その逆。

「そうだよな、みんな!? この目で見えない限りは、信じないよな！」

大袈裟な身振りで問いかける男に、会場のあちこちから「そうだそうだ」と賛同の声が湧く。反論はない。みな瞳をギラギラ光らせ、腰が浮くほど前のめりになって、猛々しい狼と美しい巫女が繰り広げる獣姦ショウを心待ちにしているのだ。

「観念してください、筆頭巫女様。さあ、いつもしているように手をつけて」

羞じらう沙織を覗き込んだ魔物使いが、さりげなく手を振る。

「く……っ!? う、ああ、そんな……っ!?」

見えないなにかに手首を掴まれ、秘部を庇っていた指を引き剥がされてしまった。粘液の糸を垂らしながら腹の下を戻ってきた手は、沙織の意思を無視して床を押す。

クウツと反り返る伸びやかな背筋、床に向かつてまっすぐに伸びた腕の間で柔らかく歪む形よい乳果。左右から圧し潰された柔肉は逃げ場所を求め、乱れた襟元を押し退けて大きくはみ出してしまった。香汗に濡れてしっとり輝く瑞々しい乳肌は観客の視線を浴びて羞恥に火照り、満開の桜のように艶めかしく染まる。

(あ、ああ、そんな……こんな……やだ、こんな、恥ずかしい！)

母のように紅い乳暈がいまにもこぼれ出しそうな襟元も、擦れ合つてムキムキと鳴り悦びを交換し合う乳房も、高々と持ち上がった尻も、緋袴に負けないほど赤らんで破れ目からはみ出した爛熟の肉アケビも——こんな姿をする者は、清く正しい筆頭巫女ではない。鼻息を荒げた狼に蜜まみれの秘裂を捧げ、いやらしい匂いを嗅がせて興奮を誘う、発情期の牝犬のよう。

「いつもしているように、と言うなら、鼻輪もつけてやらねばなるまい。首輪をかけて牝犬のようじゃが、本当はコヤツ、乳牛なのじゃ」

「にゅ、乳牛って、そんな……あつ!? や、やめ……くうっ!?」

疾風丸の言葉を受けた荒深が、首に腕を巻きつけてきた。慌てて手足を踏ん張り、必死に身体を揺すって逃れようとしたのに、うしろへ突き出した桃尻が狼の前脚にがっちり抱え込まれてしまう。

「照れるでない。いつもしていることではないか」

藻掻く沙織をからかうように、太股にビタ、ビタ、と硬い肉棒が打ちつけられた。鞘を押し退けて伸び出した、赤々と輝く狼のペニスだ。柔肌を灼く淫熱がいやらしく、塗りつけられる生温かなぬめりが気持ち悪い。

（やめてください疾風丸様、お願いです、やめて……やめて……うう）

破れ目からはみ出した尻孔や秘部にチクチクと感じるのは、狼の腹を覆った白銀の毛か。白衣に包まれたウエストは鋭い爪で引っかかれ、うなじには生温かな鼻息が吹きかかって、獣にしがみつかれているのだといやがおうにも実感してしまう。

「さあ、着きましたよ。よく似合いますな」

黒ずくめの男が言う通り、鼻孔にはいつの間にか金属製の輪がかけられていた。指輪よりは二回りほど大きく、しっかりとした輪だ。ピアッシングされたわけではないが、邪法のせいも、振っても引っ張っても取れない。

「その輪に縄をかけて、顔が仰向くよう引き上げるのじゃ」

神の声に従った荒深が鼻輪に縄を括りつけ、手首を返して引きながら立ち上がった。

「くうっ！」

小さな痛み引つ張られ、顔が仰向いてしまう。首輪をかけられた喉が反り返り、顎を懸命に上げて、魔物使いの引きは弱まらなかった。

「うう、く……はう、ああ……！」

口が大きく開く。溢れ出す甘い吐息に震える舌、痛みと恥辱にわななく唇、口腔の奥で喘ぎとともに蠕動する赤暗い咽喉粘膜——糸引く唾液にねっちょり濡れた口唇は、股間に咲きこぼれた紅い淫華以上にいやらしかった。

グ、ググ……プルルンッ！

腕の間に弾みながらこぼれ出す乳房。弛みきった上衣が、股間の肉悦の余波を受けて淫熱を孕み、ずっしりと重くなった双球を支えきれなくなったのだ。張り詰めた双球は息を吸うだけでもプルルン、プルルン、と焼きプリンのように小気味よく揺れる。甘酸っぱい汗に潤んだ乳谷や乳麓が、自らの重みに揉み込まれてしまう。

(ああ、こんな……こんな……)

首輪だけでも恥ずかしいのに、鼻輪までかけられ、無理矢理顔を上げさせられて……尻のしかかかってきた狼は赤々と輝く肉棒を限界まで伸ばし、カクンカクンと腰を振り始めている。長い黒髪が流れ落ちる襟足に、ポタ、ポタ、と滴ってくる熱い涎。

「うわ、獣だ！ 沙織様って、獣だったんだ！」

だれかが大袈裟に叫び、観客がドッと沸いた。昨日まではあんなにも大切にしてくれ、巫女様、巫女様、と下にも置かない扱いをしていてくれた人々が——いまはすべて、敵。

(いけない。恨んだりしたら魔物使いの思う壺……ああ、でも、でも！)

理性と感情に引き裂かれそうになっている沙織の傍、舞台の端に、興奮に顔を赤らめた男たちが集まってきた。いまにもよじ登りそうな勢いで首をねじ曲げ、四つん這いになっ

た沙織の胸を覗き込んで下品に笑う。

「綺麗なおっぱいだなあ。見ろよ、乳首なんてピンクだぜ！」

「エッチなんて知らなさそうなのに、疾風丸様と犯りまくってたのか」

「んん？ どうした？ そんなに興味があるのか？」

客たちの言葉に牙を見せてニヤリと笑う狼。

「民の悦びが余の悦びじゃ。よし、みなにもよく見えるよう向きを変えてやろう。てれびじよんかめらとやらも、苦しゅうない、近こう寄れ」

「く……ああっ！」

鼻輪が引かれ、抱えられた腰を捻られて、横を向かされる沙織。大きな中継用カメラを担いだカメラマンが三人、舞台上上がり、羞じらう顔と狼に抱えられた尻、猥姦されそうになっている身体をそれぞれ映す。舞台の下にもカメラが寄せられ、ゆさりゆさりと重々しく揺れる美乳を撮り始めた。

「うう、いや……ダメ……！」

冷たいレンズに見つめられた頬や乳房、緋袴の破れ目からはみ出した秘部が、火がついたように熱くなる。南天市内の情報流通を一手に引き受けているケーブルテレビのカメラだ。魔物の流入によって混乱した多くの人々は、確かな行動指針を求め、「護社からの重大発表」の中継に見入っているはず。

（非道い……こんな、こんな……うう……）

会場の観客より遙かに多くの人々が、カメラのレンズを通し、陵辱される筆頭巫女をジッと見つめている——考えただけで頭がクラクラする。現場にいる者には甘酸っぱい牝香を嗅がれ、茶の間にいる者には狼に犯された秘部を間近で観察されて——。

清く正しい筆頭巫女は、死んだ。

ここにいるのは狼に犯されて人々に嘲笑される、浅ましい変態少女。

プライドがズタズタに引き裂かれ、渦巻く羞恥に意識が白く掠れて、いまにも気を失ってしまいそうだ——なのに。

「ふむ、いい匂いがしてきた。やはり、見られながらするのが一番興奮するらしいな」

「やはりと申されますと……？」

「この娘、筆頭巫女の地位を利用して、必ずほかの巫女を呼び寄せて我とする様子を見学させておったのじゃ。お前たちもこうするのですよ、とな」

神の言葉に会場がどよめき、不穏な空気が高まる。ほかの巫女もこんな破廉恥なことをしていたのか、と、ここにはいない乙女たちを想像して血を滾らせているらしい。

「ち……違いますっ！ 私たち、そんなこと……アアッ!？」

鼻輪がクイッと引き上げられ、痛みに言葉が途切れた。美しい顔が滑稽に歪み、赤らんだ頬に涙が流れ、仰向く鼻から鼻水が、開きつばなしの口端から涎が垂れる。

「チッ！ なんて顔だ。こんなみつともねえ女を、ありがたがつて崇めていたのか！」

顔をズームアップしたカメラマンが悔しそうに舌打ちする。だが、ファインダーを覗き

込んだ目元はこれ以上ないほど弛んでいた。股間にモコッと膨れた興奮の証。滾る肉欲に支配された男たちは、沙織がなにを言おうとしていたのかなど考えようとしなない。

「乳首もピクピクしてますよ。見られて感じるって言うのは本当みたいッスね」

「マン汁が涎みたいだ。焦らしちゃ可哀想なんじゃないですか？」

我々に犯らせてください、とでも言い出しそうなカメラマンたちに、狼はフム、ともつたいぶつて頷いた。

「そうじゃな、いやらしい変態女の浅知恵にまんまとはめられていたのは、余の不覚じゃ。これ以上焦らして苦しめるのは、逆恨みというものじゃな」

唇が捲かれて牙が覗き、ぼたり、ぼたり、と滴り落ちる生臭い涎。

「うや、や、やえ……」

熱い滴をうなじに感じた沙織は、鼻輪に引かれて真上を向いた顔を歪め、舌足らずな声で呻いた。口が閉じられないせいで悲鳴までみっともなく歪む。美しい顔は鼻を仰向けかられているせいで滑稽に歪み、とめどなく溢れ出す涙と鼻水、涎に濡れてぐちよぐちよだ。首輪をかけられて獣のように四つん這いになり、白銀の狼に腰を抱えられて震える姿には、凜とした戦巫女の面影は微塵もない。

「余の民よ、よく見ておけ。これが巫女たちの正体だ！」

ピタン！ ピタン！ ピタン！

太股に打ちつけられていた肉棒が上に滑り、蜜まみれの肉畝を叩き始めた。



熱い。硬い。

(い、イヤ、ダメ！ やめてください、いいッ！)

叫んだつもりなのに、

「ンえ、んえあつ、らへ！ あえへくらさ、いひいいっ！」

金属環に鼻を吊り上げられているせいで変な声が出てしまった。

清く正しく美しいはずの筆頭巫女のみつともない姿に、会場中の観客が爆笑する。

「それはケダモノ語ですか？ なに言ってるのか分かりませんよ、沙織様！」

「分からなかったの？ 早くしてえって言ったのよ。ほら、見てよあの顔。挿入^{いれ}られる前

からぐちよぐちよじゃない」

かぶりつきで見っていた客が卑猥な言葉を交わし、狼に犯される乙女の秘部を覗き込もう

とさらに身を乗り出してきた。

(うう、イヤ……こんなの、イヤッ！)

美しい顔を醜く歪められた沙織は、両目をギユッと瞑って赤らんだ頬に涙をこぼした。

耐えがたい恥辱。こらえきれない嫌悪。自慰さえ控えて潔斎してきたしなやかで瑞々しい

身体が、劣情に我を忘れた人々に見つめられる中、興奮した獣に穢されてしまう――。

グニユリッ！

赤く尖った切っ先が、とうとう割れ目を捉えた。

「ああっ!? や、やあ……う、あああつ！ 熱いいっ！」

粘液のぬめりを擦りつけられた肉ピラが、灼ける。猛々しく怒張した狼のペニスは火傷しそうなくらい煮え滾っていた。

(いや、いや……疾風丸様でも、イヤアッ！)

艶やかな黒髪に滴り落ちてくる生臭い涎や、膣口に感じる剛直の硬さ、ヌルヌルとした粘液の感触が気味悪い。だが、乳房が弾むほど懸命に腰を捻って逃れようとしても、太くたくましい前脚にがっちり抱えられた尻はほんの少ししか動かせなかった。

グリ、グリ、グリリ——粘膜花弁を押し分けて花芯に潜り込んでくる熱い肉槍。

(だ、ダメ、入ってくる、入ってきちゃう……ッ!!)

大切な場所を守ろうとして股間に力を込め、秘裂を締めたのに——。

ぬちゃ！

「ふえあつ!? ああ、うううっ！」

たくましい弾力や煮え滾ったぬめり、滑らかでいながらゴツゴツとした異様な感覚を余計にハッキリと感じてしまった。

しかも、ただ気持ち悪いだけではない。

牡肉に触れた膣口に心地よい電流が渦を巻き、太くて長い淫茎に磨り潰されたピラピラには生まれて初めて感じる強烈な悦びが湧き上がる。

神威だ。

穢れて墮ちて半減してなお、その身体から迸る気は通常の生き物を遙かに凌駕している

のだ。

(そんな、ああ、そんなあ！　みなが見ている、こんなにたくさんのヒトに見られているの、にいい……ッ！)

ぐぶちゅ、ぐぶちゅ、と押し込まれてくる太さに合わせて卑猥な音が立つたびに、恥丘が内側から熱くなり、子宮が沸騰し始めた。左右の尻房に染み渡る甘い痺れ。感じまいとして歯を喰い縛るのに、狼がグイッと腰を進めると肉の切っ先に抉られた淫穴がバーナーで炙られたバナラアイスのように蕩けてしまう。

(感じちゃう……ああ、私、感じちゃってる……うううう！)

あまりの恥ずかしさにおかしくなってしまうそうだ。逃げ出したい、隠れたい——だが、腰に絡みついた狼の前脚は万力のように力強く、鼻輪に引つ張られた顔は限界まで仰向いて左右に振ることさえできない。巫女装束に包まれたしなやかな背筋を弱々しくくねらせ、緋袴の尻を打ち振って、仔犬のようにクウウン、と鳴くことしかできない。

「うおっ!?　本当に入っていくぞ！　こんな太いモノが……信じられねえ！」

緋袴の破れ目にカメラを向けた男が、こらえきれないように呻いた。冷ややかなレンズに映り込むのは、赤い牡肉に押し分けられて色を失うほど伸びきった粘膜花弁。

(い、イヤ、ダメ、撮さない、でえ……！)

剛直にこじ開けられた肉穴の奥に、じゅわ、じゅわ、と熱いモノが滲んでいる。感じている証の、恥ずかしい蜜。尖った先端を持つ獣のペニスが重々しく脈打ちながらズリ、ズ

り、と潜り込んでくると、

「う、ふくあ、ンふ……っ!? あ、ンああっ!」

鼻輪を引かれて仰向いた顔が赤らみ、狼の動きに合わせて甘い吐息がこぼれ出す。

理性ではこらえられない、牝の悦び。

先に潜り込んでいたスライムが神威を浴びてトロトロに熔けると、まだ牡肉に触れていない膣奥までが熱を帯びて狂おしく焦れ始めた。縮緬ちりめんのように細かな膣襞がぶつくりと膨れあがり、溝という溝にイトミミズの群が泳ぎ回っているような、こらえがたくもどかしい感覚。なにか硬いモノ——膣孔をこじ開けてゆつくりと潜り込んでいるこのたくましい淫棒で滅茶苦茶に掻き回してもらわないと、おかしくなってしまうそうだ。

「ふあ、ふあ……ふ、く、はうああ……」

「牝犬め、気持ちよさそうに鳴きよるわ。だが、これからだぞ!」

ウエストに巻きついた前脚に、グツと力がこもった。

「ふえあ? あっ!? ああ、あウアッ!? アア、アア、アアア——ッ!!」

ズンッ! ズンッ!

リズムカルな突き込みに合わせ、すさまじい感覚が爆発する。ヒダヒダの間に貼りついていた気も狂わんばかりのウズウズが、熱い溶岩を溜めた犬ペニスに磨り潰され、強烈なスパークとなって次々と炸裂。

「はあうっ! くう、は、ううう……!」

ダメ、ダメ、ヒトが見てる——溢れ出す媚声を懸命にこらえようとするのに、打ちつけられる狼の腰に合わせて身体が揺れ、腕の間で美乳が跳ねると、胸にも抗いがたい悦びが湧き上がった。捻れ踊る双球が自らの重みで芯まで揉み捏ねられ、蓄積する淫悦が乳腺を伝って胸先に集まり、乳首がぷっくりと膨れあがる。

(うう……あつ!? な、なに、コレ……ああつ!?)

なにもされていない胸先が、ピンピンし始めた。ただでさえ敏感な薄皮が弾けんばかりに張り詰めて、空気に擦れただけでも微弱電流が走るようになったのだ。たわわな肉果の側面は乱れた襟元に絶え間なくしごき回され、乳肌が熱く痺れて蕩けていく。

ズ、ズ、ズンッ!!

「ふあううっ!」

腹の底に炸裂する、一際重くて鮮烈な快感。

(お、奥に……ああつ! 当たって……アアッ!)

硬い切っ先で扶るように突かれた膣奥に、すさまじい稲光が爆発した。四つん這いになった身体が跳ねそうになり、腰にのしかかった狼が不機嫌そうに唸る。

ぐぼちゅ、ぐぼちゅ、ぐぼちゅぐぼちゅぐぼちゅぐぼちゅぐぼちゅ——。

加速する突き込み、刻み込まれる電撃。

太い肉棒に貫かれた膣穴が心地よく痺れ、狼に抱えられた腰がいやらしく蕩けていく。激しくノックされた膣奥から脳天に向けて熱い津波が駆け上り、羞恥も理性も押し流され

てしまいそうだ。

蜜壺に渦巻く悦びは突き揺すられた子宮で増幅し、沸騰した血潮に乗って全身に広がっていった。余波を受けた乳房が火照り、芯に熱い感覚が膨れあがる。タブンタブンとぶつかり合う乳谷に香汗が滲み、赤く熟した勃起乳首がいまにもなにかを噴き出しそうに細かく震え始める。

「ふやえ、やえ、やえ……はやちえまりゆ、しゃ、まあああつ！」

閉じられない口からは舌っ足らずな甘え声と、愛蜜のように芳しい涎がとめどなく溢れ出していた。長い睫に翳る黒曜石のような瞳は焦点を失って熱っぽく潤み、金輪に引かれて仰向いた鼻からは涙混じりの鼻水がとめどなく溢れ出て、筆頭巫女の顔を濡らす。

「なんていやらしい顔だ。狼に犯されて感じてやがる！」

狼にしがみつかれて喘ぐ沙織を撮影するカメラマンたちが、悔しそうに呻いた。こんな淫乱を崇めていたのか、と腹を立てると同時に、人前であられもなく乱れた美少女に欲情し、自分も犯してみたい、と興奮しているのだ。片方の手でカメラを支えつつ、もう片方の手で硬く膨らんだ己の股間をもどかしそうに撫で回す。

（いけない、邪気が……く、う、うううッ！）

頬や乳房に感じる無数の視線が、ねっとり粘り始めた。獣に犯される自分の淫らな姿が振り撒かれていた邪氣を増幅し、会場に詰めかけた人々の理性を狂わせているのだ。

なんとかしなければ、と思うのに――。

「みなもの者、よく見ておけ。これが、神風沙織の正体じゃ！」

雷鳴のような声が響き、

ズンッ！　ズンッ！　ズンッ！

突き込みがいつそう激しくなった。

「ひ、ひや、らめッ！　いへまへん、疾風丸、様あつ！」

叫ぶ声が淫らに裏返る。

グチュングチュンと鳴る膣に膨れあがる淫熱、突きまくられた膣奥に激発する快感。

頭の中に桃色の靄が噴き出し、羞恥や理性が蕩けていく。振り乱される黒髪が、吹き出す汗を吸ってしつとりと輝く。

（こ、壊れちゃうッ！　こんなに激しくされたら、私、私……壊れちゃ、うううッ！）

激しさを増す突き込みに四つん這いになった身体がガクガク揺れ、飛び散る汗、涙、涎——グポッ！　グポッ！　と捲り返される膣穴からは瑞々しい愛液が掻き出され、真っ赤に輝く粘膜花弁を伝って太股を垂れ落ちる。

ゆさゆさゆさ、たぶたぶたぶ——奔放に跳ね踊る乳房にも、淫らな感覚が溜まっていた。

自らの重みで捻れ、芯まで揉み込まれて、自然に熟していく乳果。胸先のポッチは輝くほどに張り詰めて、白衣の襟に擦れた乳肌には心地よい痺れが湧き上がる。

「ふあ、ああ、ふくあつ！　うううッ！　ああ、ああ、あああつ！」

無理矢理仰向けられて閉じられない口から次々と溢れ出す、あられもない鳴き声。膣奥

に熱いモノが炸裂するたび意識がひび割れ、胎内に吹き荒れる突風に煽られるまま遙かな高みへ駆け上っていく。

「可愛い顔して、なんていやらしいよがりっぷりだ」

「ホント、巫女の格好をしたケダモノね。鼻輪がよくお似合いなこと」

「ふえあ……ッ!」

聞こえよがしの嘲笑に、忘れかけていた羞恥心が蘇った。

（ああ、ダメ、こんな……疾風丸様に犯されて、みなさんに見られて……なのにこんなに感じてしまつて……ああ、恥ずかしい……恥ずかしいっ!）

だが、いまさら悶えても、遅い。

「グルルルッ!」

低い声で唸った疾風丸が、生臭い涎を飛ばしながら沙織の肩を甘噛みした。ウエストに絡めた前脚にグッと力を込め、腰の動きを一段と早く、深く大きく、力強くしていく。

グボチュッ! グボチュッ! グボチュッ!

卑猥な音を立てて前後する淫棒に、入り口から最奥部まで絶え間なくしごきまくられる蜜壺。突き揺すられた子宮が煮え滾り、肉芯に刻みつけられた激感が眩い光となって瞼の裏に次々と閃く。

「くうっ! ああっ! あうあああああっ!」

上擦る呼吸、飛び散る汗。

臉の裏に眩い光が閃き、意識が虚空を舞い、獣のペニスにしごきまわられた腔膜に鮮烈な電流がビリビリと渦巻いて――。

「く、来りゆっ!? なにか来ちえる! 来る来る、ああ、来ちゃああうう――ッ!」
ビクビクンッ!

桃尻を狼に抱え込まれた巫女が、雷に打たれたように反り返った。

赤らむ顔を仰向けて竿立ちになり、汗に潤んだ乳房がタップンッ! と跳ねる。
白く灼き尽くされた意識。

遙か彼方まで吹き飛ばされてしまった羞恥、理性。

跪いた緋袴の中で伸びやかな太股が小刻みに震え、狼の肉棒を深々と咥え込んだ腔穴がキユウツと絞るように緊縮し――ビュクッ!

ビュククッ! ビュククッ! ビュククッ! ビュククッ!

煮え滾った溶岩が腔奥を叩く。

「ふ、あ、ああ……な、中に、ああ、中にい……」

ねっとりとした熱い粘液が腔穴の奥に満ち、しごきまわられて痺れきった腔壁にじわ、じわ、と染み込んでくる。

ビュク、ビュク、と脈打ちながら噴き出してくる疾風丸の情熱には、キリがなかった。火傷しそうなくらい熱い粘液は蜜壺の中に収まりきらず、肉棒と腔膜の間を伝い、太さに歪められた壺口から溢れ出してくる。赤く染まった肉アケビを乗り越え、震える太股を滴

って汗ばんだ緋袴に生臭く香る白い跡を幾筋もつけた。

犯された、穢された——込み上げてくる恥辱は、淡い。

四つん這いの身体を満たすのは、喜悅の余韻。初めて体験した、なにもかもが吹き飛んでしまうあの瞬間——。

神に触れた気がした。

神楽舞で到達する法悦の境地より遙かに高く、なにもものにも代えがたい無限の悦び——。

「は……疾風丸……様あ……あっ!? ううっ!?」

グ、ググッ! グググッ!

蕩けきった肉壺の中、深々と潜り込んだ淫棒の根本が熱く大きく、拳のように膨れあがった。すでに限界に達していた膣穴は裂けそうなくらい伸びきり、絶頂の記憶が吹き飛んでしまうほどの激痛が炸裂する。

「く、ひ、ううっ!?」

「今日は一段と可愛い声で鳴くのお。御褒美じゃ、最後までしてやろう」

腰に絡みついていた前脚が離れ、沙織を犯した狼がモゾモゾと向きを変えた。尻と尻を突き合わせた、犬独特の性交体位に。

グリッ、グリリ!

熱い血潮を溜めて抜けないほど膨れあがった淫棒が、初めて牡肉を知った膣襞を磨り潰しながらゆっくり回転する。

「きひ、ひ、いいいっ!? い、痛い! 壊れ、ああ、くううっ!」

愛蜜と精液に濡れてはいても、破瓜したばかりの瑞々しい肉穴だ。丸く大きく膨らんだペニスにしごかれると、限界まで伸びきった粘膜器官が捻れ、すさまじい感覚が炸裂する。恍惚の余韻は跡形もなく消え、

「ひ、う、ううう……ッ!」

牝犬の姿勢になった筆頭巫女は真っ赤に染まった頬を涙に濡らし、雨に濡れた小鳥のようにプルプル震え続けた。

「最後までなさるのですね、疾風丸様」

「うむ。この女は淫乱だが、一応筆頭巫女だからな。余の仔を孕ませてやろう」

荒深と疾風丸の声が聞こえるが、沙織はどういう意味なのか分からなかった。ムクムク膨らんだ狼のペニスが膣穴にきつく、肉が裂けてしまいそうな痛みに脂汗が滲む——と。

ドピュッ! ドピュッ! ドピュッ!

激痛に痺れる膣奥に、濃密な粘液が再び迸り始めた。

「ふえあっ!? あ、ううっ!」

「二度目の射精が始まったようですね。一回目は膣を潤ませるための疑似射精、二回目は仔を孕ませるための本当の射精——疾風丸様の正式な妻として認められたのですよ」

顔を覗き込んできた魔物使いに笑いかけられても、沙織は応えられない。

(ああ、熱い……疾風丸様の熱いのが、ああ、こんなに……お腹が、熔けちゃ、うう!)



ビュルルッ！ ビュククッ！ ドピュピュッ！

膾奥を叩く、熱い精液。

たくましい四肢を踏ん張った狼が背を丸め、白銀の毛を逆立てて力むと、煮詰められたように濃密な白濁液がドピュ、ドピュ、と脈打ちながら噴き出してくる。痺れる肉孔に充滿し、細かなヒダヒダの隙間に潜り込んでねっとり絡みつく熱い粘液。

「うう、ああうう……」

「呻いてるだけじゃ分からねえだろ。俺たちにも分かるよう、どんな感じか言え！」

四つん這いになった沙織の正面にカメラを構えた男が、喘ぐ唇の先に大きなマイクを突きつけた。朦朧とした筆頭巫女は、わけが分からないまま応えてしまう。

「あ、熱い……疾風丸様の、熱い、のが……胎内に、いっぱい、いっぱい……ああ……」

ポタ、ポタタ——とめどなく噴き出してくる二次射精液は、淫棒に占拠された膾穴に収まりきらず、肉瘤の栓を越えて溢れ出してきた。細かく泡立った白濁液が伸びきった粘膜炎花弁に絡みつき、大きな滴となって滴り落ちる。桜色に染まった太股を煮え滾った粘液の塊が垂れ落ちて、緋袴を白く汚し、膝の間に滴り落ちて、青臭い水溜まりを作る。

「なんていやらしい……あれが、戦巫女の正体？」

「魔物なんかより、ずっとおぞましいわね」

狼と尻を突き合わせて震える巫女を、人々はギラギラした目で見つめていた——。

イヤなのに、恥ずかしいのに——上衣に腕を締められているせいで背がしなやかに反り、肩が開いて胸が張った。群がる男たちに向けて美乳を見せびらかすような、羞恥の姿勢。細いうなじからなだらかな肩、形よく盛り上がった乳房から可愛らしいへソまで、瑞々しい柔肌が青白く輝く。

「あんまり弄ってないんだな。へへ、苺みたいな色してら」

胸先に色づいた肉豆に、男たちの視線が集中した。ピカピカと輝くほどに張り詰めた、小粒のルビーのような勃起乳首。鮭の切り身のようなピンク色をしたソレは乳暈も控えめで、はしたなく膨らんでさえいなければ穢れを知らぬ乙女のようなようだ。

（だ、ダメ……見ないで、見ないでッ！）

ズクン！　ズクン！　ズクン！

紅く膨れた肉豆が、狂おしく疼く。弾けんばかりに張り詰めた薄皮は、男たちの眼差しを感じ取るほど敏感になっていた。細い針でチクチク責め立てられているような、羽根ぼうきでコチョココチョコくすぐらわれているような、こらえがたく抗いがたい微妙な感覚。

「へへ、ピクピクしてやがる。弄って欲しいんだな？」

「ち、ちが……うっ?!　くぁっ?!」

グリリッ!

松ぼっくりに似た亀頭が擦りつけられた。鱗状のコブコブに揉み込まれる柔肉。噛み込まれる乳首。まだ菌も生えていない赤ん坊たちに甘噛みされているような心地よい感覚が、

揺れる肉釣り鐘の先端を這い回る。

ぬちゅ、にちゃ、ぬちよ——コブとコブの隙間がすべて鈴孔なのか、異様な亀頭が這った跡には透明な粘液が塗りつけられていた。ぬめりに包まれた美乳が燃える。柔肌に染み込む牡エキスが呼び水となって、乳奥に渦巻いていた淫熱が迫り上がってきたのだ。

「うう、ああンうう！」

喰い縛った歯の間から甘い吐息が溢れ出す。恥ずかしいのにこらえられない。

甘噛みされた乳首に電撃が閃き、背が反り返るほど感じてしまった。尻孔がキュウツと窄まり、波打つ直腸粘膜が荒深のペニスに絡みついてしまう。

「ハハッ！ オッパイに我慢汁を塗りつけられて感じてやがる！ 変態だなコイツ！」

「そうら、ここにもあるぞ！」

グリ、 Gum、ムニユッ！

上下左右、四方八方から突き出された異様なペニスに、桜色に輝く美乳が揉み歪められる。柔肉に喰い込むおぞましい亀頭。乳暈の縁に擦り込まれる先走り汁。吸盤状の鈴孔に勃起乳首が吸い立てられてすさまじい電撃が乳房を貫く。指先のようなイボイボに乳谷が揉みまくられると、左右の肉果に甘い感覚が膨れあがった。

「や、ああ、ああっ！」

沙織の胸に悦びが湧くと、グラウンドのあちこちから甘い声が上がりが始めた。若い女は自らの細指で乳房を揉み立て、年端もいかぬ少女は傍の男にしがみついて懸命に胸を擦り



つけ淫らに腰を振りまくる。

(こ、こらえて、る……の、にい！)

我慢するだけではダメなのだ。理性の力で抑え込んでいるつもりでも、身体が気持ちよくなると周りの女たちまで感じてしまう。

「こっちのお肌も気持ちよさそうだな」

獣の目をした男たちの興味は、大切にしなければならぬはずの孕み腹に向いた。静脈の網目が透けるほど伸びきった柔肌は艶々と輝き、手を添えれば柔肌がしっとり吸いつく。欲望に濁った男の目には第三の乳房のように映るのだろう。

「や、やめて……ッ！」

自分の身を穢されるのとは違う恐怖が湧き上がってきた。宿った命を守らなければ——母としての本能に衝き動かされ、乳房が弾むのも構わずに激しく身体を揺する沙織。

グリリ、グリリッ！

剛直に貫かれた排泄粘膜が激しくしごかれた。太さにこじ開けられた肛門が熱く痺れ、左右の尻房に、そして背筋に、心地よい波が走り抜ける。

「なにを騒いでるんだ？ チンポ擦りつけるだけじゃないか」

ニヤニヤ笑った男が肉棒を握り、ツノを生やした亀頭を沙織の腹に近づける。紅い鎌首の切っ先が、上下左右に伸びて大きくなったヘソに——ピト！

「うっ!? あ、あぁっ!?」

熱い牡肉を感じた途端、孕み腹にすさまじい感覚が弾けた。

(な、なぜ……どうしてっ!? お腹、が……ああ、感じちゃ、うううっ!?)

撫でられただけでピンピン感じてしまうから敏感なのは分かっていたが、まさか、これほどは——愕然と見下ろす沙織の瞳に、モコ、モコ、と動く腹が映る。肉室に宿ったなにかが短い手足を振り回し、風船のように膨らんだ腹を内側から突き上げてきたのだ。

「見ろ、赤ちゃんが動いてるぞ!」

「腹の中にいるうちからチンポを欲しがってるなんて、淫乱の仔は淫乱ってことか」

男たちの声が遠い。

(や、やめて……暴れない、で……!)

ドンドンと突き上げられた腹が煮え滾る。子供を宿す肉室は、女の性欲を司る器官だ。しかも中にいるのは、歪んだ神具によって産みつけられたなにか。掻き回された羊水が沸騰し、張り詰めた下腹にねっとりした悦びが満ち始めた。熱いモノが膣奥に吹きこぼれ、恥丘の裏側が激しく疼く。鼻に絡みついてくる濃密な牝香。茹だったように紅く染まった肉畝の下では淫熱に炙られたピラピラが赤く輝き、じゅわ、じゅわ、と蜜を滲ませる。

「へへ、見ろよ。下の口が涎を垂らしてやがる」

「オッパイも熱くなってきたぞ。チンポが欲しくてたまんねえってか?」

女体の昂りを察した男たちが、いやらしい笑みを深めた。悶える沙織の姿に嗜虐心を刺戟され、さらに筆頭巫女の肉悦を疑似体験して、異様に昂っているのだ。顔の傍で揺れる

異様な淫棒がミチミチと膨れ、乳房に擦りつけられていたおぞましい龟头が赤みを増す。

「う、うう……く、うう……ッ！」

むくつけき淫肉から目が離せない。

熱を帯びた膣奥にアリアリと蘇る肉棒の感触。縮緬のように細かな膣襞がぷつくりと膨れ、狂おしい疼きが充滿した。煮え滾る子宮に内側から炙られた膣奥にはこらえがたいもどかしさが渦巻き、なにか硬いモノでグリグリしごいてもらいたくなる。

(ち、違うっ！ そんなこと、して欲しくなんて……な、い……)

込み上げてくる淫悦を懸命にこらえる沙織の代わりに、

「挿入て、挿入て挿入て挿入てえっ！ オマンコに挿入てえっ！」

「早く、早くうっ！ 奥が疼くの、おかしくなっちゃうのお！」

周囲の女たちが鳴き始めた。同じ年頃の少女も、熟れた体つきの大人の女性も、涙をこぼし身体を揺らし、自らの細指で秘裂を掻きむしって狂ったように泣き叫ぶ。

(やめて、ダメ……そんな声、出さないでッ！)

欲望のままおねだりできる女たちが、羨ましかった。淫獣に堕ちた人々のことなど忘れて、自分も甘い声で鳴きたくなる。

それでもなお、懸命にこらえていると。

「ひう、ひ、ひううっ！」

すぐ傍から一際高い春声が聞こえてきた。うしろ手の拘束を解かれて四つん這いになっ

た芳美だ。最後まで戦おうとしていた紅髪の少女も、沙織の淫欲に煽られ、さかりのついた牝犬のように美尻を高々と掲げていた。ズン、ズン、と突き込む男の腰の位置が高い。尻孔を犯されているからだ。身体の下に伸びた両手が己の股間を掻きむしり、蜜に濡れた割れ目をヌチュヌチュと掻き回している。

「お、お尻が、ああ……オマンコにもオ、してええ!!」

芳美が叫んでいる言葉は、沙織が言いたいことだった。淫欲に負けて鳴き叫ぶいじましい姿は、沙織自身だった。

(わ、私の……せい……?)

犯される悦びを知っているながらそれを拒み、絶頂を期待しながら懸命に耐えているせいで、肉穴は焼きつくほどウズウズしている。諸肌脱ぎになった胸では桜色に染まった美乳が愛撫を求めて震え、乳首が爆発しそうなくらい痼り勃つ。

沙織の体感が伝わるなら、周りの女性たちもみんな同じ肉欲に苛まれているはずだ。だから、あれほど精悍だった級友までが浅ましい淫女に堕ちてしまった——感じてダメ、こらえてもダメ、ならば一体、どうすればいいのか……。

「さあ、求めなさい。でなければ彼女たちの欲望はいつまで経っても満たされず、いまよりもっと淫らな生き物に堕ちていきますよ」

魔物使いの囁きが正しいような気がする。このまま痴態を恥じ、犯されることを拒んでいれば、女たちはますます狂っていくのではないかと。

「ンぷあッ！ さ、さお、りいい……ッ！」

ペニスを吐き出した芳美が、男に尻を犯されたまま這い寄ってきた。

「許して、沙織い……アタシ、もう……ダメなのおっ！」

白濁液の絡みついた紅髪が沙織の股間に迫り、緋袴のスリットに芳美の顔が近づく。孕み腹の伸びきった柔肌に額が擦りつけられ、大きな膨らみの下に頭をねじ込み、

「な、なに？ なにを……あうンッ!?」

ぬちゅ！ ちゅぱっ！

しなやかな舌が秘割れに滑り込み、繊細な粘膜花卉に熱いキスを受けた。荒深に抱えられた身体が跳ね、剛直に貫かれた尻孔に悦びが炸裂する。

「奥が疼くの、燃えてるのお！ アンタが犯されないからなんですよ!? ココにオチンチンが入らないからでしょっ!？」

「ふぁ、あ、ううっ！」

チュッチュッと吸い立てられた粘膜花卉に、すさまじい電撃が弾けた。我慢しすぎたせいでいつも以上に感度が高まっていたのか。芳美の舌が閃くたびピラピラが燃え、痼り勃つたクリトリスに生温かな鼻息が吹きかかると針のように鋭い感覚に恥丘を貫かれる。

（ああ、ダメ……ダメダメ、ダメえええっ！）

荒深に背後から抱き締められた身体が反り返りながら伸び上がった。菊門を貫いた肉棒が抜けてしまいそうなくらい尻が浮き——ズンッ！ 再び落ちて、意識が吹き飛びそうな

ほどの肛悦が炸裂。

「やあう、ああう、あああつ！」

ペニスに犯された尻孔と少女の口唇に舐られた秘裂の間に、悦びの波が往復する。反り返った身体が狂ったように捻れた。振り乱された黒髪の中から香汗の珠が飛ぶ。

タプンタプンと跳ねる孕み腹、ゆさゆさ踊りまくる乳房。汗ばんだ乳谷が擦れ合い、双球がじんわり熱くなった。胸先に色づいた肉豆は限界以上に勃起して、微風に撫でられただけでも微弱電流が湧き上がる。

大きく膨らんで張り詰めたボテ腹も芳美の紅髪にくすぐられ、伸びきった柔肌に心地よい細波が広がった。染み渡る肛悦と漂う精臭に炙られた身体はいつも以上に感度を増し、全身が性感帯になっていく。

「だ、ダメ……やめ、あああつ!? そ、そんな、奥、までえっ!?」

しなやかにくねる芳美の舌が、ピラピラを掻き分けて奥へ奥へと潜り込んできた。愛蜜を吹きこぼす花芯がせせられ、肉壺の口が尖った舌先に抉られる。

ゾワゾワッ!

膣孔から子宮に向け、一気に駆け上がる細波。

「くう、あ、あああつ！」

母胎の異変を感じ取ったのか、肉室に宿った胎児まで暴れ始めて、膣洞の中を悦びの波紋が往復する。

(ダメ、ダメ……そんなこと、され、たら、あああつ！)

ぬちや、びちよ、と秘所を掻き回す舌から逃れようと、沙織は長い髪を振り乱し、ずつしり重くなつた美乳を弾ませて必死に身を振る。だが、荒深の剛直に尻孔を貫かれているため腰が動かない。無理に動けばゴツゴツした肉棒に菊膜をしごかれ、繊細な直腸粘膜が熱い亀頭に揉み立てられて、尻の中が蕩けてしまう。

「ああ、イイ……」

むちゅつ！ ちゅ、ぶちや！

沙織の秘部を舐めると己の股間が気持ちよくなるのか、芳美は頬をうっとり弛めながら舌の動きを早めた。唾液に濡れた肉膜が花芯を穿り、壺口をこじ開けて進入してくる。柔らかな唇を押しつけられ、いやらしくくねる舌尖に穴裏の腔膜が舐めまくられると、

「ふはっ！ うう、ふああつ！」

悦びの波が恥丘を駆け抜け、熱い感覚が孕み腹に広がる。

「なんていやらしいよがりっぷりだ。コイツ本当に筆頭巫女様か？」

喘ぐ唇を狙い、紅く怒張した肉棒が擦りつけられた。

(い、イヤッ！)

慌てて顔を背けたのに、そちらにも別の亀頭が待ちかまえていた。唇に塗りつけられる青臭い粘液。口を閉ざして反対側へ顔を振ると、赤らんだ頬が硬くて熱い肉塊にムニユツと揉み込まれる。

「や、ンぷっ！　ンんむ……むおっ！」

Gumモツ！

叫ぼうとした口に生臭い肉塊が押しつけられた。閉じようとした唇が煮え滾った肉クサビにこじ開けられ、抗う舌がどっしりした重さに磨り潰される。

おぞましい、汚らわしい——湧き上がりかけた嫌悪は、淫肉の熱さに溶けていく。痺れるような肛悦が長く曲がりくねった消化器官を遡り、口唇粘膜が性感帯に作り替えられていたのだ。息苦しいのに気持ちいい。味蕾に染み込む甘辛さが美味しくてたまらない。

(ダメ、ダメ……感じたら……ダメ……)

自分が口で気持ちよくなったら、ほかの女たちちまでが——焦りさえ、もはや掻き立てなければ湧いてこなかった。舌や唇に感じる牡肉のたくましさは胸が高鳴り、鼻腔をくすぐる精臭に頭の芯が痺れていく。

「へへ、チンポ啜えてうっとりしてやがる。上の口でこんなにいやらしい顔になるんだつたら、下の口に突っ込んだら一体どうなっちゃうのかな？」

「挿入てみようか？」

紅髪の少女の尻を犯した男が、唇の端を吊り上げてニンマリと笑った。同時に芳美がンアッ！　と呻き、顎が外れんばかりに大きく口を開いた。

「あ、ああ、あああつ!？」

伸びきった唇が震え、舌が異様なほど垂れる。糸を引いて垂れ落ちる涎に白濁液が混じ

り——ズズ、ズズ、ズズズ!

舌とは別の赤い肉塊が、喉の奥から迫り出してきた。

(な……なに!? なにが起きて……あッ!?)

硬く膨らんだ木の芽のような、寸詰まりの紡錘形。舌を押し潰し、唇を押し分けてズズズ、ズズズ、と迫り出してきたソレは、親指をみつつかねたくらいに太いペニスだった。肛門から潜り込んだ異様に長い淫棒が、曲がりくねった消化器官を逆流し、喉を貫いて、芳美の口から伸び出してきたのだ。

「ンお、お、ああ……!」

仰向いた芳美が涙をこぼし、赤く染まった頬をふわっと弛めた。気持ちいいはずはないのに、よがっている。肉棒を欲して燃える沙織の膣穴に身体全体で共鳴し、牡肉に触れた粘膜が性感帯に変わってしまったのか。

「ふたり同時に犯せるのか? いいな、ソレ」

「へへ、貸さねえぞ」

自慢げに胸を張った男が、芳美の紅髪をムンズと掴んだ。

「ンえあつ!? え、ああ……」

呻く少女の口からさらにズルズルとペニスが伸び、涎に濡れた肉茎が露わになる。

「中里のお嬢様のケツは具合よかったが、筆頭巫女様のオマンコはどうかかな?」

「ン、ンうう……ンぷあつ!!」

ぐちゅっ！

芳美の唾液に濡れた切っ先が、蜜まみれの肉華に押しつけられた。熱くて硬い肉瘤が刻み込んでくる快感は、少女の舌の比ではない。牡肉に押し潰された粘膜花卉にすさまじい電流が駆け巡り、早くも腰がカクンカクンと跳ねてしまった。

「お？ 積極的じゃないか」

紅髪を掴んだ男が嬉しそうに笑い、腰を突き込みながら芳美の頭を動かした。

ぐちよ！ ぐちゅ、ぬぐちゅっ！

沙織の秘部に埋もれた紅い亀頭が媚肉のレールに沿って上下に滑り、ピラピラを掻き回して卑猥な音を奏でる。

「ンお、あ、むお……おおっ！ むぶおっ！」

秘裂に炸裂する快感、産みつけられて膨れあがる熱い悦び。磨き抜かれたルビーのような肉塊が、肉ピラを掻き分け壺口をしごき、尿道を掠めてクリトリスを打つ。

(な、中里、さん……ごめんな、さい……)

口から生えた淫棒で沙織の秘部を汚す級友は、肉奴隷でも家畜でもなく、ただの淫具。こうなってしまったのは自分のせいだ、助けなければ——しかし。

「ぶあ、浮く、浮いて……あむおっ！」

股間に爆発した熱い波動が次から次へと背筋を駆け抜け、意識がグイグイ押し上げられた。走り抜ける激流に背が捻れ、艶々と輝く孕み腹が重々しく弾む。

びたん！ びたん！ びたん！

胸先に紅い乳首を膨らませた美乳が激しく揺れて、汗ばんだ乳谷がぶつかり合った。衝撃が甘い。双球に悦びが満ち、乳腺に熱いモノが充滿して、肉豆が紅く大きく勃起する。

「可哀想に、オッパイがパンパンに張っているじゃないか」

「そりゃいけねえ。トロトロになるまで俺たちが揉み解してやるよ」

ムニユ、グリ、グリリ！

乳房の上下左右から、いくつもの男根を擦りつけられた。目玉を生やしたり鈴孔をいくつも広げたりした異様な亀頭が、汗にぬめる乳谷にはまり込む。

「ン、ンむうう……ッ！」

熱い牡肉を感じた場所に強烈な電流が炸裂した。乳白色に輝く肉釣り鐘全体が、クリトリスになってしまったかのようだ。尻孔を貫かれた腰がもどかしそうにカクカクしゃくり、牝汁を垂らす肉アケビが芳美の口目がけてゲイツと迫り出す。

——ぬじゅぽっ！

煮え滾った肉塊が壺口にはまる。

「ンんあああつ!! ンあ、ンあ、んううッ！」

花芯がグリグリ穿られ、猛々しく怒張した肉クサビがめり込んでくる。

(は、入って……ああ、太い、硬い……あ、つ、イイッ！)

真っ赤に灼けた鉄の棒で、大切な場所を犯されているような——左右に割り開かれた脚



がプルプル震え、腰から下の感覚が痺れて消えた。仰け反った背筋は元に戻らず、ペニスを啜えた口から涎がダラダラ垂れ落ちる。

「なんだ？ もうイッチまったのか？」

芳美の尻に取りついた男がいやらしい笑いを深め、腰の動きを早めた。

「ンむあっ!! む、むあえあえええっ!!」

涎と涙と鼻水を撒き散らし、ビクンビクンと痙攣する紅髪の少女。四つん這いになった身体が激しく前後し、男根を生やした口が沙織の秘部にぐちよ、ぐちよ、と当たって、

「ふえっ!! は、はうっ! や、あ、あああっ!!」

今度は沙織が涙をこぼし、啜えさせられていたペニスを吐き出して狂ったように喚く。

「は、入って、入って……裂けちゃ、ああ、ウウウッ!」

「これくらいでピイピイ鳴くな。赤ちゃんを産まなきゃならねえんだぞ」

「そ……そんな、ああ、く……ひいっ!」

ゴリ、ゴリ、ゴリ!

ただでさえおぞましく膨れていた亀頭は膣の中でさらに大きくなり、まるで握り拳のよう。愛蜜を滲ませて震える細かなヒダヒダが、押し広げられ、磨り潰されて、すさまじい感覚が次々と刻み込まれる。

ビリビリ感じるのは膣だけではない。

(お、お尻、まで、ええっ!!)

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>